

特別  
講演

## 「邪馬台国を再考する」

石川 日出志（明治大学文学部教授）

私は弥生時代を専門とし、東日本に身を置きながら、西日本の調査・研究もつねに視界に入れてきました。そうした目で北部九州をみた時、最近 10 数年間で特に注目する点が2つあります。第一は、福岡市域よりも東側で弥生時代前半期に関する著しい成果が上がったこと。第二は、魏志倭人伝に記された北部九州の国々の様子がかなり明らかになってきたことです。

第一の点は、弥生時代早・前期初頭の宗像市田久松ケ浦遺跡で、朝鮮半島的な構造の石槨木棺墓に朝鮮半島製磨製石剣・石鏃を副葬する墓地、また宗像市田熊石畑遺跡と古賀市馬渡・束ケ浦遺跡で、青銅器多数を保有する木棺墓群・甕棺墓群が、それぞれ確認されたことです。従来、北部九州では、どうしても福岡平野と糸島地域（のちの奴国と伊都国）を優位とみる傾向がありました。しかし、弥生時代早・前期～中期前半はそうではなく、各地の社会や首長はまだ並列的で、特定の地域が突出する状況にはない。つまり、これらの遺跡は、宗像界隈も北部九州の最有力地域のひとつであることを証明するものです。のちの奴国・伊都国地域とその首長が突出して優位になるのは、そのあとの中期後半（前1世紀）になってからであることがはっきりしたと思います。その後、大陸系の威信財を好んで副葬する墓は確認できなくなりますが、当地域が、山口県域から日本海沿岸方面および関門海峡を経て瀬戸内方面の諸地域と北部九州諸地域とをつなぐ扇の要の位置にある重要性は、それまでと変わらないことは言うまでもありません。

第二の点は、本講演の主題と直結することです。もちろん、魏志倭人伝は、魏という国家が、倭人たちは敵対する呉の背後の位置に所在するという論理から、魏が倭国（女王国）を重んじた記述をし、特に政治的交渉を繰り返した点が主題となっています。景初3年（西暦239年）以後の記事がそれですが、しかし魏志倭人伝で、対馬国・一大（支）国・末盧国・伊都国の描写がじつに具体的なものととても重要です。冒頭には、対馬国・一大（支）国・末盧国の特徴を巧みに表現した記述があります。魏の帯方郡の使いが実際に往来したことの反映でしょう。しかし伊都国には情景描写はなく、「世々王あるも皆女王国に統属す」とか、「一大率」設置記事とか、制度面の記事が具体的です。「（帯方）郡使の往来常に駐まる所」だからでしょう。次にでてくる奴国の記述が簡略なのと著しく対照的です。これら一大（支）国・末盧国・伊都国・奴国の考古学的調査がずいぶん進展しました。

一大（支）国の壱岐島では、その中心集落である壱岐市原の辻遺跡が継続的に調査され、船つき場施設が検出され、楽浪郡や三韓からの文物が多数見つかっています。末盧国については、唐津市桜馬場遺跡で、戦中の1944年に防空壕を掘った際に完形の後漢鏡面や鉄刀、巴形銅器・有鉤銅釧多数が副葬された甕棺が発見されましたが、近年の再調査で、その地点が確認できました。唐津市中原遺跡では大規模な墓地が調査され、後漢代の連弧文鏡など末盧国と大陸とのつながりを示す資料が蓄積されています。

伊都国域では、中期後半の糸島市三雲南小路遺跡で前漢鏡30面あまり、後期前半の同市井原鑓溝遺跡で前漢末～新代の銅鏡17面、後期中頃～後半の同市平原遺跡で銅鏡40面がそれぞれ副葬された墓が江戸時代と1965年に発見されています。三代にわたる伊都国域の最有力者の墓地です。それら被葬者の生前の拠点集落である三雲遺跡も、その全容と変遷を描く論文も発表されています。近年特に注目したいのは、同市の潤地頭給遺跡や浦志遺跡・上灌子遺跡、福岡市元岡・桑原遺跡、同市今宿五郎江遺跡など伊都国（から奴国西部？）の海域に近い地区に立地する遺跡の調査成果です。潤地頭給遺跡では、山陰系の技術と思われる玉作を集中的に行っていることや準構造船が確認され、浦志遺跡と今宿五郎江遺跡では朝鮮系小銅鐸、今宿五郎江遺跡では楽浪系などの朝鮮半島系土器や中国銭貨が発見されています。一大（支）国・末盧国・伊都国がそれぞれ明確な拠点をもち、大陸と密な交流を重ねている様子がわかります。さらに奴国域でも、西新町遺跡ではオンドル施設をもつ住居や朝鮮半島系土器が明瞭で、五銖銭や貨泉という中国銭貨も出土しており、大陸からの物資と情報が往来する姿が鮮やかです。ただし、奴国域では、弥生後期＝西暦紀元後の漢鏡集中副葬墓はなく、「漢委奴國王」金印以外に「奴國王」の姿は確認できません。

邪馬台国問題を考える時、伊都国域一帯の調査成果の蓄積は非常に重要です。魏志倭人伝冒頭の伊都国に「世々王あるも、皆女王国に統属す」の「世々王あるも」は、三雲南小路・井原鍵溝・平原遺跡の3時期にわたる銅鏡多副葬墓とよく対応しています。また、中ほどの記事に「一大率」が常に伊都国に置かれて、倭王が魏・帯方郡および馬韓・弁韓・辰韓に、あるいは帯方郡が倭国に、それぞれ使いを送る際に、港で積み荷の文書や賜物に錯誤がないことを点検しているという記事（「王遣使詣京都・帯方郡・諸韓国，及郡使倭国，皆臨津搜露，伝送文書賜遺之物詣女王，不得差錯」）も、潤地頭給遺跡や元岡・桑原遺跡群、今宿五郎江遺跡の立地や出土遺物をよく説明してくれるように思います。

では、邪馬台国はどこか。この問題については、私は、BC 1 世紀～AD 2 世紀に北部九州でもっとも有力なのは、考古学的には伊都国と奴国の領域です。その伊都国が「世々王あるも皆女王国に統属す」のですから九州以外と考えるのが自然です。最近、中国古代史の渡邊義浩氏が、「自女王国以北，特置一大率，檢察諸国。諸国畏憚之。常治伊都国，於国中有如刺史。」の「刺史」は魏では地方に置くものであり、首都圏は「司隸校尉」なので、この2文字だけで邪馬台国は九州以外と断定できると指摘しています。

この問題で重要なのは、①古墳時代のような西日本各地の最有力首長が遠隔地間で連携する仕組みがどのようにしてでき上がったか、②2 世紀末から3 世紀前半に大きな社会制度の再編がどこで起きているか、の2点だと考えます。①については、島根県出雲市の西谷3・4号墓で、その埋葬後の儀礼の場で用いられた土器の中に、吉備や丹後・北陸方面からもたらされた土器群が確認されたのが重要でしょう。日常用いる土器や鉄器などが他地域で出土する事例は各地で確認できますが、最有力首長の葬祭儀礼の場に遠隔地の首長が参画する状況は、北部九州でも畿内でも見られません。西日本各地の最有力首長が遠隔地間で連携する仕組みは、中国地方で始まったと考えざるをえません。

②について注目したいのが拠点集落の編成替えです。北部九州では、弥生時代早期から古墳時代まで存続する大規模集落である福岡市比恵・那珂遺跡群が、後期後半に南北1 kmにも及ぶ大集落の中央に、南北を貫く道路が設けられ、それを軸として住居や墓地をマス目状に計画配置する方式に編成替えされます。奈良盆地では、弥生時代前期から後期まで長期にわたって中核集落であった田原本町唐古・鍵遺跡が後期末になると急速に縮小し、それと交替するように、それまでは本格的農耕集落が立地することはなかった扇状地に、桜井市纏向遺跡と天理市布留遺跡という古墳時代の中核となる大規模集落が形成されます。奈良盆地内の集落群が大きく再編されたと考えられます。2 世紀後半でしょう。こうした集落・地域再編が北部九州と畿内だけなのか知りたいところです。ただし注目したいのは、この纏向遺跡が形成されるとまもなくその周縁部に「纏向型」前方後円形の墳墓が形成され、次いで箸墓古墳という誰もが定形的古墳と認める全長約280mが出現し、さらに3 世紀末～4 世紀の大形前方後円墳が集中するオオヤマト古墳群が形成されます。これらの一連の動向は、初期ヤマト王権の形成過程としては誰も異論ないでしょう。

しかし、私は、邪馬台国所在地論の前に議論すべきは、倭国内の諸国域が2～3 世紀までどのように発展し、かつ相互関係がどのように推移するかを描くことだと思います。倭国の中枢の所在地だけを追うのではなく、倭国社会を多角的に読み解くことです。



### 石川 日出志 (いしかわ ひでし)

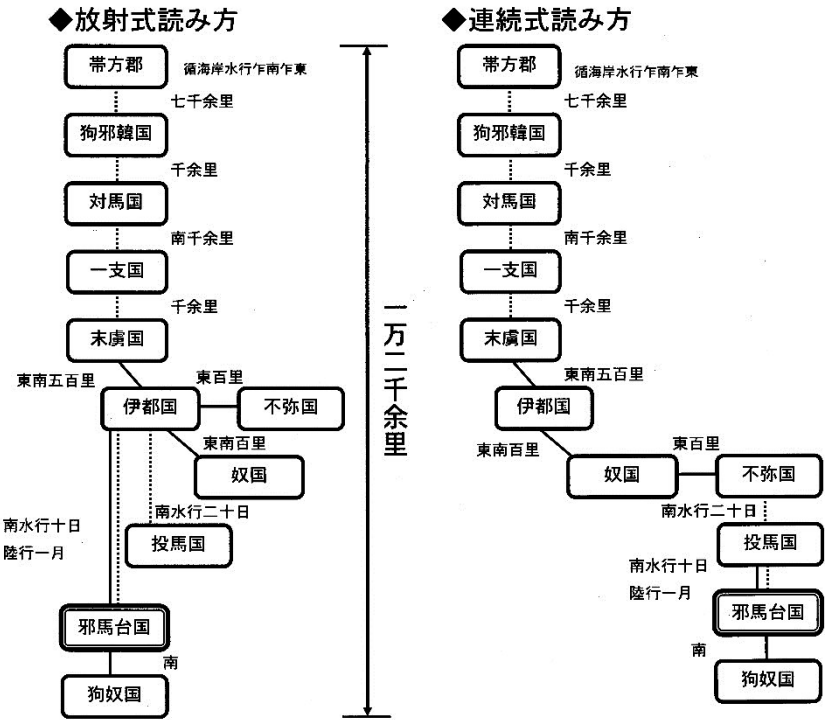
1954 年新潟県生まれ。明治大学文学部教授。

1978 年明治大学文学部考古学専攻卒業。1983 年同大学院文学研究科博士後期課程中退、同文学部助手、同専任講師を経て1991 年同助教授、1997 年同教授。

著書に（共著）『考古資料大観 1 弥生・古墳時代 土器 I』（小学館）、『「弥生時代」の発見 弥生町遺跡』（新泉社）、（共著）『弥生人とまつり』（六興出版）、『農耕社会の成立』（岩波新書）など。



3世紀ごろの東アジア



邪馬台国への道のり

いせきんぐ宗像シンポジウム年表

平成26年9月7日

主な出来事	中国王朝	西暦	時期区分	宗像地域	北部九州	近畿		
B.C.108 楽浪郡設置 ・分百余国の時代(漢書地理志)  A.D.8 王莽、皇帝と自称 A.D.25 後漢王朝成立 A.D.57 倭奴国王後漢に遣使 A.D.107 倭国王帥升、後漢に遣使  倭国大乱 A.D.184 黄巾の乱 A.D.208 赤壁の戦い A.D.238 公孫氏滅亡 A.D.239 卑弥呼魏に遣使 ・この頃、卑弥呼死す A.D.265 西晋成立 A.D.266 曹魏西晋に遣使	秦	200	弥生時代前期	■ 田熊石畑遺跡(集落) ■ 朝町竹重遺跡 ■ 光岡長尾遺跡(陶墳) ■ 香葉遺跡(陶墳)	● 吉武高木遺跡 ● 板付田端遺跡 ● 馬渡・束ヶ浦遺跡			
	前漢	150	中期前半	■ 田熊石畑遺跡(区画墓) ■ 割抜式木棺墓6基	● 朝町竹重遺跡SK28 ● 宇木汲田遺跡 ● 吉野ヶ里遺跡北墳丘墓			
				100	中期後半	● 久原遺跡IV-1号墓	● 吉武樋渡75号甕棺墓	
						50	● 田熊仲尾遺跡(銅剣) ● 上八中羅尾遺跡(石棺・銅剣)	● 須玖岡本D地点甕棺墓 ● 三雲南小路1.2号甕棺墓 ● 立岩遺跡10号甕棺墓
	0	新						
	後漢	50	後期	■ 富地原川原田遺跡(集落)	● 井原罫溝遺跡甕棺墓 ● 桜馬場遺跡甕棺墓			
				100	■ 富地原森遺跡(集落)			
				150				
	魏・呉・蜀	200	後期終末	■ 徳重高田遺跡(石棺墓・土壙墓)	● 平原遺跡1号方形周溝墓	● 纏向石塚古墳 ● ホケノ山古墳 ・纏向遺跡(大形建物)		
				250	■ 光岡辻ノ園遺跡3号住居 ■ 久原瀧ヶ下遺跡3号住居 ■ 富地原川原田遺跡24号住居 ■ 今川遺跡包含層	● 那珂八幡古墳	● 箸墓古墳	
						300	● 徳重本村遺跡2号墳(前方後円墳) ■ 徳重高田遺跡1号祭祀遺構	● 久里双水古墳
	西晋	300	古墳時代前期	● 東郷高塚古墳	● 津古生掛古墳			

※本年表は事務局試案です。